

ワクワク留学体験記

Bauhaus-Universität Weimar Augmented Reality Lab

岩井大輔（大阪大学）



バウハウス大学本校舎

1. バウハウス大学

2007年4月から2008年3月までの1年間、ドイツのワイマールにあるバウハウス大学に、博士客員研究員として滞在しました。私は元々、海外での研究活動に純粋な憧れと強い興味を持っておりました。そこで博士学位取得後、日本学術振興会の特別研究員の任期の残りを利用して、海外での研究滞在を行うことにいたしました。近代デザイン・建築・アート発祥の地として有名な当大学は、第二次大戦中にナチスによって閉鎖された後、東西ドイツ統一後に創立の地ワイマールに再建されました。現在は、アート・建築・都市工学・メディアといった学部によって構成される総合大学です。私が滞在了したのは、メディア学部のメディアシステムコースという、バウハウス大学では数少ない理系機関の一つでした。このため、アートやプロダクトデザイン、建築を専攻する学生や研究員と知り合う機会が多く、彼らの発表・展示等も多く拝見することができ、異なるバックグラウンドを持つ人々と交流できたことは、私にとって非常に良い経験であったと思っております。バウハウス大学は、キャンパスを持たず、街に点在する建物を買い上げもしくは間借りして教室やラボに当てるといふ、ドイツでも珍しいタイプの大学でした。ちなみに私が研究を行ってありました場所も、街の文化遺産で、昔ドイツの著名な薬学者がラボとして使っていた古い歴史的な建物の中でした。

2. 研究

私は、プロジェクトとカメラを利用した拡張現実感の研究分野を引っ張っておられる、Oliver Bimber 教授の元で研究を行いました。学生の質、特にプログラミング能力は高く、与えられた研究テーマを実装していくスピードは非常に速かったことが印象深かったことを覚えています。ファンドのついた研究プロジェクトでは、それぞれ博士課程在籍の学生が1名、研究アシスタントとしてフルタイムで雇われ、それをRAとしてパートタイム

で雇われている学士・修士学生がサポートするという体制で研究活動が行われておりました。また、それとは別に、学士・修士学生は、半年毎に単位取得の為にそれぞれコースの教授陣の提案する研究プロジェクトを選択し、研究室に配属されて研究を行います。このため、学生は半年毎に一定の研究成果を出すことを要求されており、それを次々と達成していく様子は、日本のように修士であれば2年間かけて一つの研究プロジェクトをじっくりと行っていくというスタイルには無いスピード感があり、非常に刺激的でした。ちなみに、学士・修士学生は、全ての単位取得後、それぞれの学位論文執筆の為に、半年から1年程、一つのテーマに絞って新しい研究を行います。

このように、周りが常に全速力で研究を進めていたことに触発されて、私も非常に中身の濃い、充実した研究生活を過ごすことができました。これは、実は日本に帰ってから気付いたことなのですが、日本では、周りの関係ない雑談でさえも、全く注意を傾けていないつもりでも無意識のうちに気にしていたり、ポスターのような公共ディスプレイも目に入ってくるだけで、注意して読んでいるわけではないのに無意識のうちに気にしていたのだということを実感しました。つまり、滞在中、巷にあふれている文字、聞こえてくる言葉は、普段読み聞き慣れている日本語でも英語でもなく、ドイツ語でしたが、実はこれがまさに心地よいノイズとなり、私の集中力を促進し、研究に一心に集中できる良い環境を作ってくれたのだと思っています。

学生、先生共に、しっかりとバカンスをとるのもヨーロッパならではの楽しみではないでしょうか。夏と冬に10日から20日程度しっかりと休みを取り、イタリアやスペイン等のリゾート地で羽を休め、また帰って来て仕事をする。仕事からバカンスへの、そして、バカンスから仕事への切り替えの早さには強く感銘を受けたものの、日本には無いこの仕事スタイルを非常に羨ましく思いました。

ドイツでは、博士は30歳手前で取得すると言われる程、大学生・院生の平均年齢は日本よりも高めです。同じラボで研究を行っていた博士課程の学生も、私と同年もしくは1歳年上でした。客員研究員と博士学生という立場の違いはあったものの、同じ年代のドイツの研究者を知る良い機会となっただけでなく、少なくとも私は強い競争意識を持って研究活動に打ち込みました。これらの優秀な同年代の研究者達に恵まれ、交流を持てたという経験は、私にとって非常に大きな財産であると思っております。

3. 日常

ドイツは、良い意味で古い価値観を大切にしながら発展してきていると感じました。しかしながら、コンビニエンスストアは1件もなく、スーパーを含めた全ての商店は日曜日はお休みという状況でしたので、24時間365日営業中の日本の状況になれていた僕にとって、土曜日に日曜日の分の食材を買い忘れる時が多く、困ったことがよくありました。また、ご存知の通り、ドイツ国民の環境に対する意識は高く、ちょっと郊外へ出れば、至る所に発電用の風車が立ち並んでいました。リサイクルに対する社会制度も整っており、ペットボトルや瓶を返却すれば1本20円ほどのキャッシュバックがありました。

ドイツと言えばクラシック音楽ですが、これに関しては、日本とは比べ物にならない程に最高の環境です。ワイマールには、リスト音楽大学という世界の有名オーケストラにも人材を輩出するレベルの高い音楽教育機関があり、日々、学生のミニコンサートが催され、ハイレベルな学生の演奏が、殆どの場合無料で聴けました。また、ワイマールも他の街と同様にオーケストラを抱えており、通常の演奏会に加えてオペラを、日本で観るのを考えれば破格の値段で鑑賞することができました。有名音楽家も多数来訪し、私が滞在中では、指揮者の佐渡裕氏の公演が行われておりました。特に、2008年に引退を表明しているピアニストのAlfred Brendel氏の演奏を聴く機会に恵まれ、クラシック音楽好きな私にとっては、夢のような時間を過ごせました。

ワイマールは旧東ドイツの小さな地方都市だったのですが、日本のように閑古鳥が鳴いているような寂しい商店街等はなく、多くの地元の人が市場に買い物に出てくるなど、街は常に活気づいていました。また、ワイマールはドイツの歴史上非常に重要な街でもあります。まず、ゲーテ・シラーの居住地を中心として市街地一帯が世界遺産として指定されております。ご存知の通り、ワイマールでは第一次大戦後、ワイマール憲法が制定されたことでも有名であり、私がオペラを鑑賞していた国民劇場は、その憲法制定の場所であり、数々のゲーテの劇が初演さ

れた場所でもあります。また、バウハウス大学の本校舎も世界遺産でした。

言葉の面では、研究室での会話は、英語で問題なかったのですが、日常生活においてドイツ語は必須でした。レストランや日々のスーパーでの買い物に必要なドイツ語はすぐに覚えたのですが、特殊なものを購入したい場合、買った商品を返品したい場合、郵便物を日本に送る場合、役所での手続きなど、片言のドイツ語では対応できないような状況が多々あり、非常に苦労いたしました。しかしながら、英語ではない、第三の言葉を覚えて話すという経験は非常に刺激的でした。通じた時のあの爽やかな気持ちは今でも忘れられません。

4. ドイツ滞在を終えて

ドイツ国内で研究活動をしていきますと、やはり、科学技術の中心地はアメリカにあるのだ、ということを感じていました。しかしながら、それでも、日本と同様にアメリカ以外の国で、世界のトップ研究者として活躍される教授の、研究に対する姿勢を間近で見ることができたのは、非常に良い経験となりました。また、渡航前に旧東ドイツに滞在すると言ったときに、幾人かの方から、危険ではないのかと心配をして頂きました。少なくとも、私の感想ですが、日本と同じか、それ以上に安全な場所であったことをここに付しておきます。最後に、海外に行くとはよく、「海外かぶれ」になると言います。私はそのようにかぶれて帰ってくる友人などを見るにつけて、こういう風にはなりたくないと思っておりましたが、ヨーロッパにいくと、間違いなく「ヨーロッパかぶれ」になります。抗うことは出来ません。ドイツはビールの



市場で賑わうマーケット広場とワイマール市庁舎

美味しい、本当に良い国でした。

【略歴】

岩井大輔：大阪大学 大学院基礎工学研究科 助教。投影型複合現実感に基づくディスプレイ技術やそれを応用し